キェルケゴール『死に至る病』の「キリスト教的理解」

信岡茂浩

一

『死に至る病』と題されたこの作品は、第一篇「死に至る病とは絶望のことである」[1]と、第二篇「絶望は罪である」[2]とに大きく二分して論述されている。第一篇では、人間を蝕む絶望の諸相が、第二篇では、神を前にした罪の諸相と、キリストを前にした躓きの諸相が[3]、それぞれ分析され、文学的描写はその日常生活のあり方にまで及んでいる。

そこから、本書の第一篇はキェルケゴールの言う心理学的な内容にとどまるものであり、それに対し第二篇はキェルケゴールの言うキリスト教的、教義学的な内容であるとされ[4]、第一篇を第二篇と切断し独立した絶望論と見て、その絶望論に伏在せしめられたキリスト教的な理解が看過黙殺されることが少なくない。特に、第一篇冒頭の「人間とは精神である。」に始まる箇所(以下便宜上、自己論と呼ぶ)[5]は、既にあまりにも有名となっているが、その反面、かような議論が本書の冒頭に位置づけられねばならぬ必然性には全く注意を払わぬ如き理解も見受けられる。

しかし、本書の第一篇は、そのような解釈を安易に許容するであろうか。極論すれば、第一篇は普遍的内容として承認するが、第二篇は特殊なキリスト教的内容として否認せざるを得ないという如き解釈が、果たして成立可能なのであろうか。第一篇が、キリスト教的な事柄以前の、或いはキリスト教的な事柄を抜きにした意味での心理学的内容に限定され得るか否かが問題となる。

キェルケゴール自身にとって絶望は、おそらく如何にしても克服せねばならぬ深刻きわまる問題であった。だが、破滅の道を踏み迷い、絶望を問い詰めてゆくところに、逆にキリスト教の問題が、真に自分自身の問題となってくる。第一篇は、そのようなキェルケゴール自身の絶望体験を踏まえ、自己が絶望を病む現実を取り扱うものである筈である[6]。

本稿は、以上の問題意識から、『死に至る病』第一篇の論述構造に留意し、そこに伏在するキリスト教的なものを指摘することを目指している。「死に至る病」という、この一風変わった書名の示すものが、緒言に始まりどのように扱われてゆくかに着目しながら、順次、先の内容を前提としてその後の内容を理解するという手順で、第一篇の内容の検討を進めたい。

二

「死に至る病」という書名は、緒言によれば、ヨハネ伝のイ

エスのことば「この病は死に至らず」から取られている。ヨハネ伝でラザロの病について言われたそのことば通りには「死に至らない」と言われているのが、これにもとづく書名の方は「死に至る病」となっている。「この病は死に至らず」ということばから、「死に至る病」は二通りに考えることができる。

先ず、イエスによって「この病は死に至らず」と、「死に至る」ことが否定される以前には、ラザロの病は死に至る病であったということである。普通にこの死に至る病という言葉から連想されるのは、致命的な病、回復の見込みのない命とりになる病、その終局が死と定まった死病である。だが、かような意味での死病は、死に至ることによってそこで終結する。

いまひとつは、イエスによって「この病は死に至らず」と宣言されたものが、更にその後、何らかの仕方で再び否定され、「死に至る病」となる場合である。何れにせよ、「死に至る病」という書名は、イエスのことば「この病は死に至らず」から、それ以前にか、それ以後にか、外れた形になっている。書名がそこから外れている「死に至らず」とは、それでは何を意味し、何故かく言われ得るのであろうか。

キェルケゴールによって本書の著者とされるアンティ・クリマクスは、[7] 緒言に於て、死に至る病の何たるかを、後の場合である方へ強調する。イエスが「この病は死に至らず」と言う意味を、アンティ・クリマクスは、腐臭漂う死者ラザロがその墓の中から蘇らされたという、超自然的事件としての奇跡に結びつけて理解するのみならず、更に、たとえそのような超自然的出来事がなかったとしても、信ずる者にとって復活でありいのちであるキリストが、現にこのラザロのもとに在るということだけで、「この病は死に至らず」と言えるのだ、と主張する。[8]

死体が蘇生するという自然の掟を破る事件ではなく、ラザロのもとにキリストが現に在るという、キリストとラザロとの現実こそが、「この病」の「死に至らない」ことを意味するものであるというのである。既にここに至って「死に至る病」の「死」の意味は、自然的なこころとからだの死、心身の死の意味にとどまるものとしては理解することができない。後に、人間がそれであると言われる精神、自己[9]の生死の問題へ「死」の意味は拡張されている。[10] 同時に「病」の意味もまた、ラザロを文字どおり死に至らしめた心身の病から、精神の病、自己の病へと拡張されていることに注意しなくてはならないであろう。さもなくば、ここでの「死に至らず」の意味は、ラザロの心身における死を前提とした上では成り立ち得ない。そして、そこで「死に至らず」と言わしめるものは、キリストが死者ラザロのもとに在るという現実であると、そのことが決定的な位置に据えられるのである。

さて、精神である自己の生死を問題にしてキリストにいのち

を見出すことが、[11] この緒言にいわれる「キリスト教的に理解され[12]」た理解であるなら、後続の箇所で「キリスト教的に理解すれば、死でさえも『死に至る病』ではない[13]」と言われることも了解され得る。だが問題は、かく人間的に言われる場合の死に至る病がキリスト者にとって怖れるに足りぬものであるということではなく、キリスト教的に理解された場合のその「死に至る病」が一体何であるかということなのである。人間的に言えば死より怖ろしいものであっても、それはキリスト者にとって決して「死に至る病」ではないと断じる。他方、キリスト者のみがそれの現に在ることを学び知った最も怖るべきもの、それこそが「死に至る病」なのである。[14] 正体不明のまま否定的強調を重ねられるその「死に至る病」とはそれでは何であるのか。緒言はかくの如き問いを鋭く突きつけて、当の「死に至る病」の何たるかを学び知ることへ我々を導き入れる。[15]

「死に至る病」が何であるかを知るのはキリスト者のみであると言われる限り、我々がこれから読み進んで「死に至る病」が何であるかを学び知ってゆくということは、同時に、我々がキリスト者となってゆくことを要求するものであることが知られるであろう。「死に至る病」を理解することは、「覚醒と建徳のため[16]」という副題と一致して、アンティ・クリマクスの言う意味でのキリスト者になりゆくことへ方向づけられている。

三

緒言に続く第一篇は、「死に至る病とは絶望のことである[17]」という標題で始まる。「絶望」という言葉がここに至って登場する。そして、死に至る病とは絶望のことなのだと唐突に宣言されるのである。

この標題に至るまでの箇所では、死に至る病は我々にとってまず書名として印象づけられており、目次を除外するなら、次いで緒言に於て、ヨハネ福音書との関連で詳しく論じられた事柄である。そこでの内容を裏返して言えば、死に至る病とはキリスト者でない者には正体不明であり、その恐怖さえ知られざる事柄なのであった。そのことは先に検討したが、少なくとも緒言に於ける死に至る病の扱いは、死に至る病の何であるのかを読者に理解させる様に直接目的づけられたものではない。寧ろ、そこでキェルケゴールはアンティ・クリマクスの立場から死に至る病をきわめて明確に規定しながらも、その規定の仕方に於て同時に、死に至る病が何であるかをではなく、それが何でないかを、「人間的に言うなら」「キリスト教的に理解されるなら」という二通りの道筋を提示して明らかにし、そのことを通して、我々が書名やヨハネ伝の記事から思い描いているイメージを徹底的に否定しようとしている。にも拘らずそれは説明でもあるかの様な形をとってなされているのである。だが、我

我は死に至る病の何であるかをかく説明されることにより、却って逆に分からなくされてしまうことになりかねない。福音書に即した説明をうけて、死に至る病の正体もその危険も理解できないのなら、つまり我々はここで言われている「キリスト教的に理解する」立場に未だ到っていないのであり、そこで我々は自らを非キリスト者の立場に位置づけねばならなくされる。

ところがここで、「死に至る病とは絶望のことである」という第一篇の標題は、そのように緒言の説明によって突き放されていた我々にも理解の手掛りを与えてくれるように映る。「死に至る病」には戸惑わざるを得なかった読者であっても、これ以後は何かしら理解の及ぶ内容が展開されているのではないかと期待することができる。緒言で異様に強調された怖るべき「死に至る病」に比べ、絶望とは、およそ本書を繙くような読者にとっておそらくより身近なものとして理解された現実的な事柄であるに相違ないからである。絶望のことであるなら我々にも十分理解できる。否、死に至る病が絶望のことであるのなら、我々は死に至る病そのものさえ現実には既に知っている筈ではないか。正体不明に強調されてきた「死に至る病」が絶望のことだと言われる時、読者は「死に至る病」の理解を絶望に求めるよう方向づけられるのである。

それでは、第一篇はどのようにして「死に至る病とは絶望のことである」ということを言わんとしているのであろうか。目次によって第一篇全体を概観すれば、それはA、B、Cの三つの部分に大きく分けられ、各々が見出しをもってその内容を示している。順次たどれば、Aは、「絶望は死に至る病であるということ」という見出しの下に更に小さくA、B、Cと三分され、各々の内容が小見出しで示されている（これらを以下便宜上AのA、AのB、AのCと呼ぶ。他も同様）。Bは、「この病（絶望）の普遍性」という見出しでひとまとまりの論述をなしている。このBとそれに続くCの見出しに於ては、死に至る病は「この病」[18]とされてその直後に括弧をつけてそれが絶望と同内容であることが示される。Cの見出しは、「この病（絶望）の諸形態」とされ、ここに、AのA冒頭の自己論から抽象的に展開される絶望の諸形態と、それらの形態の絶望を病む絶望者の生の具体相とが、まざまざと描写されているわけである。

四

第一篇を大きく三分するA、B、Cの、Aをその論述構造から検討してみたい。Aの見出しは「絶望が死に至る病であるということ」である。この見出しは第一篇全体の標題「死に至る病とは絶望のことである」の下に並置されて、その主語「死に至る病」と述語「絶望」とが入れ代った形をとっている。第一篇全体で「死に至る病とは絶望のことである」ことを言わんと

するに際し、先ずAは「絶望は死に至る病であること」を言うことを以て始められるのである。

ところが、このAが更に小さく三分された最後のAのCでは、その小見出しが「絶望は『死に至る病』である」となる。これはA全体の見出しとほぼ同じであるが、ここでの死に至る病は引用符を伴っている。引用符に括られた「死に至る病」は、これ以前には緒言の末尾にある。[19] 従ってこの「死に至る病」は、緒言末尾の死に至る病と同内容であるといってよい。このAのCに至って、キリスト者のみが学び知った最も怖るべき「死に至る病」とは絶望がまさにそれである当のものなのだと、明確に規定されるのである。

このAのCに先立つAのA、AのBでは、A全体が「絶望は死に至る病である」ことを言わんとするものであるにも拘らず、死に至る病という言葉は姿を潜めている。AのCで、緒言以後はじめて死に至る病が登場する。そしてここでは、それまで正体不明のまま放置されていた死に至る病が、読者の期待どおり、その特別に理解されなくてはならない意味を解説されることになる。[20] 絶望が、死に至りつつ死ぬことができない、死という最後の希望さえも失なわれた永遠の断末魔を生きねばならなくされるものである所以は、絶望が単なる病ではなく、他者から措定され手ばなされることによって自己自身に関係するひとつの関係となった永遠者なる自己が、[21] 自己自身を食い尽くそうとして果たし得ない無力な自己食尽に他ならないからである。この自己は永遠なるものであるから死ぬことができない。絶望者は絶望を過ぎ去らせることもできなければ終息させることもできない。[22] 絶望は常に現在にあり絶望による死は絶え間なく生に転化する。

ここで絶望と死に至る病とをひとつに結び合わせているものは、AのA冒頭以下に記されるそれ自身に関係する関係としての自己である。[23] 絶望が我々人間の現実に顕われ支配する根拠と、死に至る病がまさに「死に至る」ものである事情の根拠とは、いずれも人間たる人間がかくの如き自己に他ならないということに求められ、そのことがA全体を通して自己論の展開として語られるのである。絶望は死に至る病であり、死に至る病とは絶望のことである。この、死に至る病と絶望の同一は、両者が、自己とは何であるかという冒頭の問に対する応答と共に語られるところで、いつしか否み難いものにされている。

絶望が、自己に於ける、精神に於ける病であるが故に、それは特別な仕方で理解することを要求する死に至る病と同一のものとなるのである。[24] AのA、AのBが、人間がどのような自己であるかということと、絶望がそのような人間の自己に於けるいかなる病であるかということとを、専ら詳細に論じているのは、それを通して、絶望が「死に至る病」であることが帰結してくるからに他ならない。Aの内容は従って、その冒頭に据え

られた自己論に基礎をもっている。Aに続くB、Cに於て、死に至る病が、この病(絶望)という扱いを受けるに至ることの根拠は、冒頭の自己論にあると考えられる。

さて、その自己論を冒頭に置いて始まるAのAは「絶望は精神に於ける、自己に於ける病である」という小見出しを掲げている。この小見出しの上の行には、Aの見出しが「絶望が死に至る病であるということ」と記されている。[25] この両者を重ね合わせてみると、「死に至る」と「精神に於ける、自己に於ける」とが内容的に同位置となる。この病(絶望)が「死に至る」病であるのは、この病(絶望)が「精神に於ける、自己に於ける」病であることに根拠をもつことが、既にこの小見出しと見出しの関係から窺われる。そこで先ずAのAは、絶望が何であるかには触れることなく自己論から絶望の三つの形態を帰結させ、絶望をかくの如き自己から由来する自己の現実としてのみ規定してしまう。

Aのbに至っても、[26] 絶望の可能性と現実性は、あくまで人間の自己とは何であるかという自己論に固着して抽象的な展開を見るばかりで、絶望の具体相にはほとんど言及されていない。結局、絶望にしてみてもその内容については死に至る病と同様、AのCに至るまで語られていないと言ってもよいのである。しかし、この思弁的とも映じかねぬ外観を呈しつつ自己論が冒頭以下ほぼA全体に繰り広げられているのは、先に緒言に於てキリスト教的にのみ理解が及び得る事柄として強調された「死に至る病」を、「精神に於ける、自己に於ける病」として解明し、それを、凡そ人間たる人間に於て普遍妥当的に承認され得るであろう絶望の真相と同一のものであるとなす、その根拠がこの自己論にあるからに他ならない。人間というものが、凡そ人間と呼ばれるべきものである限りなべてここで言われる様な自己であることを承認するなら、人間たる人間はことごとく絶望を携えており、しかもその絶望とは死に至る病に他ならないことが、そこから帰結されてくるのである。このことは、更にB、Cに於て問題にされてゆく事柄である。

絶望とは、それ自体として何らキリスト教的な理解を要求する事柄では無論ない。人は各々自分自身の何らかの失意体験に照らして絶望を了解している。だが、死に至る病とは、本書では単なる死病の意味に止まるものではなく、緒言に繰り返し強調された如く、キリスト者のみに学び知られたと事柄として規定され、キリスト教的な理解にのみ属する事柄であった。そうであるなら、死に至る病が「死に至る」病である特別事情を詳細に説明するAのCは、「キリスト教的に理解された」当のものでなくてはならないことになる。のみならず、「死に至る病とは絶望のこと」であり「絶望が死に至る病であるということ」は、いずれも「死に至る病」についての判断であるから、これはアンティ・クリマクスの立脚するキリスト者の立場より

理解されてはじめて言明可能な事柄である。それ故、絶望の由来を根拠づけかつ死に至る病の死に至る所以を根拠づける自己論は、「キリスト教的に理解されるなら」と言われる場合の、隠された根拠をなすものでなければならない。自己論は、かようにキリスト教的な理解の根拠をなすものとして、決定的にキリスト教的な根本見解である。自己論は、キリスト教的理解のみが及び得る、つまり人間的に言えば不可解な事柄と主張された「死に至る病」を、「精神に於ける、自己に於ける病」として分析解明する役割を担い、本書を貫くキリスト教的根本見解として、アンティ・クリマクスの手によって冒頭に固く据え置かれているのである。[27]

五

絶望とは我々人間にとって心的苦痛の極である。しかし、その苦痛がいかにはなはだしくとも、それはAのCに示されているような意味で「死に至る」病であるとは思われない。我々は、自身の経験を省みてその矛盾きわまる苦悩を察し、それに共感することはできても、絶え間なく死に至りつつなお死に絶えることができないという如き表現は、解消不能な苦悩の文学的表現として理解されるのみで、事柄に即した客観的な理解よりすれば奇妙な誇張とさえ思われるのである。[28] 第一篇Cに言われる如く、我々が自身の経験にもとづいて絶望と名づけているものは、それがいかに大きな不幸による深い心の傷であったにせよ、やはりそれとて時の経過につれ次第に弱まりゆくものであり、その意味では一過性の有限な事柄に属するからである。

ところが、本書の絶望理解、即ち、絶望は死に至る病であり死に至る病とは絶望のことであるとする理解より見れば、絶望についての我々のかような経験的理解は、嘲笑されるべき程に皮相浅薄なものと判断される。[29] 絶望は元来そのような一過性の有限な事柄に止まるものではない、絶望するという事態の根底には、自己を自己たらしめた他者にかかわる事実が潜んでいる。我々が絶望するとは、我々が既に絶望していたということ、我々の自己が絶望という死に至る病を病むものであったことの顕現に他ならない。それまで真正なる自己自身の事実に無知であった者が、何らかの出来事の衝撃によってその無知を破られ、絶望である自己自身に覚醒せしめられる。しかし、絶望の真相ともいえる「死に至る病」は、未だキリスト教的に理解することには至らない我々には認知され得ない。我々の経験する心的現象としての絶望の根源に、根底的事実としての絶望的自己を見透すのは、アンティ・クリマクスのキリスト教的立場のなせるわざである。換言すれば、絶望が死に至る病であるということを学び知っている者こそがアンティ・クリマクスによってキリスト者と呼ばれるのである。我々が第一篇Aの内容を理解するに至るということは、キリスト教的理解に至るということに

他ならない。「絶望が死に至る病であるということ」は、我々がキリスト者となりゆく方向を取る時に初めて、自己とは何かという自己自身の根底的事実に即した事柄として了解され得るのでなくてはならない。

しかし、そうだからといって、この病(絶望)がキリスト教に固有の特殊事態だと言われるのではない。絶望はすべての人間が人間であることに係わるのである。第一篇**B**では、**A**に於てその真相を「死に至る病」であると看破された絶望が、実はすべての人間たる人間を例外なく蝕みつつあるという絶望の普遍性が主張される。[30] 経験的な意味で絶望したことがないということは、決して当人の自己が絶望を病んでいないことを意味しない。逆だ、と言われるのである。絶望が精神に於ける、自己に於ける病であるかぎり、精神であり自己である人間はすべて、自覚の有無、意識の程度にかかわらずことごとくこの病(絶望)を病む者であると診断される。ここでもまた、自己論に基づいて人間を精神の規定の下に考察することが決定的な役割を果たしていることが指摘できるが、[31] とはいえ、ただ精神の規定の下に考察することが主張されるばかりでは、我々自身もその病(絶望)を病む者に他ならないという自己の絶望的現実は、さほど説得的に身に迫り来るものではない。そこでこの**B**に次いで、**C**がこの病(絶望)の諸形態を病の現実に密着した具体的な姿に描き出すことになるのである。

人間を精神の規定の下に考察すること、即ち第一篇**A**のA冒頭以下の自己論が、いかに説得的な議論であるかは、漸く第一篇**C**での絶望の分析を通して明瞭になってくる。というのも、**C**に於ける絶望の諸形態は、この病(絶望)を病む絶望者の多種多様な絶望の実態に即して、病の現実を観察することから始めて分類整理されるのではなく、自己論を反省的に展開することを通して抽象的に見出されるという仕方で分析描写されているからである。かくして、自己論より抽象的に見出され来る絶望の諸形態の各々が、我々の経験的に知る絶望の現実態といかに符合し、かつまたそれを解明するものであるかということが、それまで仮説的な位置に止まっていた自己論の真理性を、いわば虚構的に、しかも迫真的に、「実証」して見せる。

CのAに於ける、自己意識を考慮に入れずに総合の諸契機のみを反省することから見出される絶望の諸形態[32]は、この病(絶望)のいわば病状をその原因となる諸要素と具体的な症状の両面にわたって示している。これらの病状は、**C**のBに於いて描かれる様々な形態の絶望[33]にも伴なうものと理解されなくてはならない。**C**のBが自己意識の上昇を尺度として絶望の激化を動態的に把え展開してゆくのに対し、**C**のAはこの病(絶望)の病状を、総合を構成する諸契機の各々に関連させて指摘するものである。**C**のA、**C**のBは、いずれも**A**のA冒頭の自己論の展開の順序に従って、各々の観点から絶望の諸形態の可能性を反

省的に展開する。CのAでは、自己は諸契機の総合であるという観点から、CのBでは、自己は単なる総合ではなく、精神として自己自身に関係することであるという観点から、CのB終結部ならびに第二篇では、自己の全関係は措定された関係であり措定者との関係の内に置かれている自己であるという観点から、[34] この病(絶望)が論じられる。かくして一切の絶望は、AのCで示された「死に至る病」に他ならないとその真相が曝露されてゆくのである。それはどこまでも自己論に基づき従って反省的に展開されつつ、同時に、絶望を病む者の個々の人格の現実性に密着した病の診断となっている。

六

本書の序に言われる如く、絶望を診断するのは心理学者のなすことである。[35] しかし、絶望を死に至る病であると診断することは、キリスト教的な理解、アンティ・クリマクスの卓越した理解に拠らなくてはならない。この病(絶望)を診断するのは心理学者である。しかし、それを一人一人の患者の個別的な現実に即して診断するのは「真摯な気づかい」である。この「真摯な気づかい」とは、建徳的なもの、キリスト教的認識であるとされる。

第一篇に於てかくの如きキリスト教的診断がこの病(絶望)について、絶望者の個別的現実について遂行された結論が、即ち、絶望は死に至る病であるということになる。こうして第一篇が死に至る病とは絶望のことであると規定した後に、第二篇は絶望は罪であると規定するのである。死に至る病とは絶望のことであり、絶望は罪である。ここで絶望は死に至る病と罪とを結ぶ媒概念となる。この媒概念たる絶望を介せずに、死に至る病は罪のことであり、罪は死に至る病であるというなら、それは当時のデンマークのキリスト教界に於て、またおよそキリスト教が既知の事柄とみなされている所では、ほとんど同語反復に近いあたりまえの意味にしか受けとられ得ないのではあるまいか。絶望という媒概念を用いることによって、アンティ・クリマクスは人間の内面世界へ深く介入し、そこに覚醒と建徳の場所を拓こうとするのである。緒言に於いて死に至る病は、キリストとラザロとの人格的関係の現実から否定的に規定された事柄として理解された。死に至る病が問題にするのは、単に自己自身に絶望する人間的に言われた絶望に止まらず、それを介して更に、神の前に立ちつつ神に絶望すること、キリストと共にありつつキリストに絶望すること、絶望として理解された罪と躓きに他ならない。

本書第一篇は、以上の意味に於て、「死に至る病とは絶望のことである」(第一篇標題)ということを、「覚醒と建徳を目指し」「キリスト教的心理学的」(副題)に解明している。その解明に際して、絶望が死に至る病であり死に至る病が絶望である

ことを根拠づけるのは冒頭の自己論である。自己論はかくてキリスト教的な理解を可能ならしめる根拠として本書の論述の出発点となる。絶望を診断するという心理学者のわざを、どこまでも人間とは精神 (Geist) であるという根本見解[36]に基づきながら、その自己論の展開として、同時にあくまで個々の絶望者の人格の現実性[37]への気づかいとして、真摯 (Ernst) に遂行する。これが『死に至る病』第一篇の内容である。

付記

本稿に用いたテクスト及び略号。

Sören Kierkegaard, Gesammelte Werke in GTB Siebenstern. Herausgegeben von Emanuel Hirsch, und Hayo Gerdes, Gütersloh.

KT: Die Krankheit zum Tode, Gesammelte Werke Abt. 24/25, 1982[2].

BA: Der Begriff Angust, Gesammelte Werke Abt.11/12, 1981.

註

(1) KT, S. 8.

(2) KT, S. 75.

(3) KT, S. 113 f.

(4) Vgl, BA, S. 11.

(5) KT, S. 8 f.

(6) KT, S. 3, 4.

(7) 周知の如く、キェルケゴールが本書に用いた仮名である。極度に高いキリスト者の立場を意味する。キェルケゴール自身は自らを本書第二篇に示される如き宗教的詩人にすぎぬとしていた。KT, S. 75-77.

(8) KT, S. 5 f.

(9) 『死に至る病』に於ては、精神 (Geist) は自己 (das Selbst) と同格に扱われる。

(10) 「キリスト教の用語では死は最大の精神的悲惨を表現する」と序に記される。KT, S. 4.

(11) 絶望による死を介してのみこれは可能である。「救済はまさに死ぬことに、死に切ることにある」。KT, S. 4.

(12) KT, S. 6.

(13) Ebd.

(14) KT, S. 7.

(15) 「死に至る病」と邦訳されるが、これは死病の意である。

(16) KT, S. 1, 8.

(17) KT, S. 8.

(18) 目次を参照されたい。

(19) KT, S. 7, 13.

(20) KT, S. 13 f.

は、まさにその謎を解明するキェルケゴールの人間学である。

(28) 文学的な修辞ではなく、自己論から帰結する客観的事態として指摘されている。

(29) KT, S. 50.

(30) KT, S. 18.

(31) KT, S. 18-24.

(32) KT, S. 25-29.

(33) KT, S. 39-86.

(34) KT, S. 9 f.

(35) KT, S. 3 f.

(36) KT, S. 18.

(37) KT, S. 4.

(21) KT, S. 11.

(22) KT, S. 14.

(23) KT, S. 8 f.

(24) 絶望を自己に於ける、精神に於ける病であると理解しないなら、絶望は何ら「死に至る病」ではない。人間の自己が精神 (Geist) であり、絶望が精神の病である故、「死に至る」のである。

(25) KT, S. 8.

(26) KT, S. 18.

(27) 我々は絶望の何たるかを経験的に知っているつもりであっても、それでは何故人間のみが絶望し得るのか、その絶望の出所が人間であることの何処に在るのかを知らない。自己論